

輝き。それは"ポケモンマスター"

ルビィちゃんキャンディー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター。縮めてポケモン。この世界はたくさんポケモンで溢れている。そんな世界の小さな島に、ポケモンマスターを目指す少女がいた。少女は仲間と、そしてパートナーと出会い、今、少女、高海千歌、の冒険が始まる

他の小説と被る点があるかもしれませんが

オリジナル地方です。近いうちにマップを投稿します

目次

1話	「始まりの出会い」	1
2話	「旅立ち」	12
3話	「到着！ホシウラシテイ」	23

1話 「始まりの出会い」

ポケットモンスター。縮めてポケモン。

この星の不思議な不思議な生き物。

彼らはこの星のあらゆるところでその姿を見せる。

海に。空に。山に。街に…

「……いよいよ、だね」

そして、みかん色の髪をした少女、”高海千歌”の冒険が始まろうとしていた

ー
ウチウラ島
ー

今日も太陽の日差しが海を輝かせる。

ここは”ウチウラ島”。

ガルス湾に浮かぶ、小さな島である

千歌「今日もいい天気く!!」

た
この島に住む数少ない若者の一人、”高海千歌”はこの日が来るのを心待ちにしてい

千歌「そろそろ来るころだよね…」

待ち合わせをしている千歌。

海岸通りなので、海からの風が千歌の全身を包み込む

「おーい！千歌ちゃん!!」

千歌「あ！曜ちゃん！」

曜「おはヨーソロー♪」

千歌の幼馴染で、同じく数少ない若者の一人、”渡辺曜”。
遠くから走ってくるその姿は、まさに元気な少女であった。そして――

千歌「リオルもおはヨーソロー！」

リオル「リオ！」

渡辺曜のパートナー、”リオル”。

リオルは曜が小さなころから一緒にいるポケモンなので、まるで兄妹のような。そして家族のような大切なポケモンである

曜「じゃあ、そろそろ行こっか！」

千歌「うん！私たちの旅立ちのために！」

曜、千歌「トチマ研究所！」
リオル「リオー！」

ウチウラ島には村が点々と存在する。

そんな村の中でポケモンの研究所がある”トチマ村”は千歌の村であり、研究所は千歌の家でもある

千歌「お母さーん！曜ちゃん、連れてきたよー！」

美奈「お疲れ様！曜ちゃんとリオルちゃん、いらっしやい♪」

曜「おはようございます！」ケイレイ

リオル「リオー！」ケイレイ

トチマ村のポケモン研究所でポケモンについて研究をしている”高海美奈”。

千歌の母親であり、ポケモン博士界ではかなり有名な人物

美渡「母さーん、学会に出す書類出来たよ」

美奈「助かったわ〜♪ありがと！」

千歌の姉、”高海美渡”はポケモン研究員で美奈の助手。

千歌にはもう一人、年の離れた姉があるが、その姉は別の仕事をしている

千歌「お母さん、今度は何の発表をしているの？」

美奈「ふふっ♪発表してからのお楽しみ！」

美渡「今回の発表は凄いぞお！千歌！」

珍しくテンションが高い美渡。

そんなに凄い発見をしたのだろうか…

まあ、ひとまず旅をしていればいつか耳に入るだろう

美奈「あ、そういうえば他にやる事があつたわね」

美奈は千歌と曜とリオルを研究室の奥へと案内する。

そう、千歌達は美奈から旅に出る前に”あるもの”を貰うことになっていた

美奈「千歌達はわかつてると思うけど、この”スクスタ地方”では、たくさんのポケモンと出会えるわ」

〈スクスタ地方〉

ポケモンの世界にはたくさんの地方があるが、このスクスタ地方では様々な地方の環境が集まっている。常夏の海辺もあれば、吹雪が吹き荒れる山脈もあり、火山があれば広大な森もある。ポケモンの生息種も全地方トップクラスで、ポケモンの研究者達の中ではスクスタ地方は最高の研究地と呼ばれている

美奈「あまりにも数が多すぎるから、正直、私達でもスクスタ地方の生息ポケモンを全ては把握しきれいていません！」

そう言うと、美奈は千歌と曜にスマホのような機械を手渡した

美奈「だから！二人には旅に出てもらって、スクスタ地方の図鑑を埋めてほしいの！」

美奈「この”ポケモン図鑑”でね！」

〈ポケモン図鑑〉

美奈が千歌達に渡したのは、スクスタ地方の図鑑が読み込まれている機種。他の地方から見れば、スクスタ地方の図鑑は全国図鑑と同じレベルなので、千歌達は最初からとんでもないものを渡されたのである。ちなみに、普通のスマホの機能も搭載されている

千歌「やったー！ついにポケモン図鑑を貰ったあ！」

曜「憧れのポケモン図鑑だ……」

二人は小さな頃からポケモン図鑑を貰い、旅に出ることが夢だった。

今の二人は、目をキラキラさせている子供と同じ目をしている

そして

美奈 「千歌！好きな子を選んでね！」

千歌がパートナーと出会う時となった

曜 「凄い!?何体いるの!?!」

美奈 「うーん、”御三家”って呼ばれる子達を集めたから、ざっと21体?」
曜 「す、凄い…」

千歌 「……………」

千歌の目の前には個性溢れる。

そして、形・色様々なポケモン達が千歌を見上げていた

千歌「私の…パートナー…」

千歌は旅に出るまで、ポケモンを持たないと決めていた。一緒に何もないところから。

0から始めたいと思っていたからである

曜「千歌ちゃん、選べるのかな…」

美渡「日が暮れるんじゃない？」

美奈「…大丈夫みたいよ」

千歌「!!!」ビリビリ!!

千歌の脳内に電気が走った。

ある、一体のポケモンと目があつた瞬間だった。

一瞬だった。

この子となら、私は頑張れる!!と

千歌「…」スタスタ

千歌はそのポケモンの元へと歩いていく。

この一歩一歩はすでに旅の。

そして千歌がポケモントレーナーとしての一部分である

千歌「私、高海千歌！夢はポケモンマスターになること！」

「…」

そのポケモンは千歌をじっと見ている。

どうやら、千歌を見定めているようだ

千歌「私はこの広い世界であなたと旅をして、誰よりも強く。そして最高のトレーナー、ポケモンになる！」

「…!!」

千歌は手を差し出す。

そしてその手にゆつくりと、まだ小さな手が重なった

千歌「これからよろしくね！」

千歌「ケロマツ！」

ケロマツ「ケロ!!」

こうして千歌の、そしてケロマツの物語は幕を開けたのである

― 続く ―

2話 「旅立ち」

前回の、ポケライブ！

スクスタ地方にある小さな島に住む千歌は、幼馴染の曜と共にポケモン図鑑を手に入
れ、ケロマツをパートナーとして選んだ。これから千歌達の壮大な冒険がはじまる!!

千歌「よろしくね！ケロマツ！」

ケロマツ「ケロ！」

曜「ケロマツ！」

美渡「へえ…意外だなあ」

千歌がケロマツを選んだことに、美渡は驚いたようだ。

これで旅にでる準備は整った。

千歌はケロマツをモンスターボールの中に戻そうとしたが、

曜「あれ？千歌ちゃん、ケロマツを戻さないの？」

千歌「ケロマツとはなるべく一緒にいたいと思ったの！」

ケロマツ「ケロツッ！」ピョン！

ケロマツはその通り！と言わんばかりに千歌の肩に乗る。

もうすでに千歌とケロマツは心を通わせ始めていた

美渡「ケロマツって確か、ちよつと気難しいポケモンだったよね……？」

美奈「そうね……千歌ちゃんも一瞬でケロマツを選んだから、なかなか興味深いわね♪」

千歌と曜は凶鑑を手に入れ、パートナーもいる。

すぐに出発しよう！そう思ったのだが……

千歌、曜「船がない!?!」

美奈「次の定期船が3時間後だからねえ……」

ウチウラ島は離れ島。

定期船に乗らなければ旅などできない。

その定期船がウチウラ港に着くのは3時間後……要するに、千歌と曜は今すぐに旅に出たくても出れないのだ

曜「どうする、千歌ちゃん？」

千歌「うーん……泳ぐ？」

千歌の案で海に行こうとした時だった。

美奈から提案があった

美奈「あ、二人とも果南ちゃんには会ったの？」

千歌、曜「……」

美渡「まさか、何も言わずに行く気だったの??」

千歌、曜「忘れてたあああああ
!!!!!!」

ウチウラ島の西にポケモン研究所と港。

南にはダイビングショップがある。

ウチウラ島の北と東の沖は激流と渦潮が多数存在する危険な海域。

しかし、西と南の沖はサンゴ礁で観光でも有名である

ー ダイビングショップ ー

「まったく…まさか忘れてるなんてね」

千歌「ご、ごめんね果南ちゃん」

曜「ポケモン図鑑を貰うのが楽しみすぎて…」

千歌と曜が話している少女は、この島の数少ない少女の一人、”松浦果南”。

この島で両親とダイビングショップを営んでいる。

千歌と曜とは1歳違いで、姉妹同然の仲である

果南「まあ、分からなくはないけどね。船が来るのは？」

曜「あと2時間後ぐらいかな？」

果南「そつか。寂しくなるね…」

千歌「…果南ちゃん」

産まれる前からの付き合いだった。

毎日、いつでも、この3人は一緒だった。

実感はわからない。

きつと、いなくなつてから分かるんだらうなあ…果南は二人を見ながらそう思った

果南「言いたい事は山ほどあるけどさ…」

千歌、曜「？」

果南「とりあえずハグ、しよつか！」

千歌、曜「うん！」

日常的にハグはしているが、ここまで離したくないと思ったハグは初めてだった

千歌「じゃあ、そろそろ行くね！」

果南「うむ！たまには連絡してね」

腕を組み、二人を見送る果南。

二人の姉として見送るその目には……

果南「涙が、なんて思った？」クルッ

果南は二人を最後までは見送らなかつた。

千歌達がこの島に戻ってくる前に”これ”を作らなければならなかったからだ

果南「涙はこれを作ったあとかなん？」

果南は腕をまくり、まだ骨組みだけの建物の建設作業に戻った

果南「千歌のケロマツ、すっごくいい目をしてたなあ…」

ー ウチウラ港 ー

美奈「何かあったら連絡ちょうだいね」
千歌「それ果南ちゃんにも言われた！」

千歌と曜の旅立ちと聞いて、島の住民達が見送りに来ていた。

若い人が島がいなくなるのは寂しいが、それ以上に千歌達に期待を持っていた

「千歌ちゃんと曜ちゃんのポケモンは、どちらもいい目をしていますな」

「ええ！二人には頑張ってもらわないと」

曜「千歌ちゃん、船が出るよ！」

千歌「うん！行こ！」

千歌達は船に乗り込んだ。

ついに、千歌と曜の壮大な旅が始まるのだ

美奈「頑張つてね〜」

美渡「バカチカ！泣くんじゃねーぞ！」

美奈「美渡ちゃんが泣いてどうするのよ…」

美渡「ば!?!泣いてない…」グスッ

千歌「あはは…」

船が徐々に見えなくなる。

今回は町に遊びに行くのではない。

この世界を冒険し、ケロマツとポケモンマスターを目指す。

千歌の気持ちは高ぶり、弾け飛びそうだった

千歌「私達のポケモントレーナーとしての最初の町は”ホシウラシテイ”!!」

曜「ついに始まったんだね…私達の冒険が！」

ケロマツ「ケロ！」

リオル「リオ！」

今は名も無きポケモントレーナー。

将来、この二人、そしてポケモン達が世界を震撼させる存在になるとは…まだ誰も。

そして本人達でさえ知らない

― 空港 ―

「ここがスクスタ地方ね」

一人の少女がスクスタの地に降り立った。

リュックを背負ってスマホ片手に目的地であるホシウラシテイを目指す

「あなた達を使うことが起こらなければいいけど…」

スクスタの太陽に照らされた少女のバレッタほどの宝石よりも輝いていた

― ??? ―

「シンオウ地方へ行っていた幹部から報告が入った。無事に回収出来たようだ」

「…そうですか、これであと少しですね」

「ああ。私達の野望が実現するのは近い。そして、」

「お前の願いもな」

「……」

ロープに身を包んだ人物の顔はわからない。

しかし、うつすらと見える目に――

――色などなかった

3話 「到着！ホシウラシテイ」

前回のポケライブ！

幼馴染の果南に別れを告げ、ついに旅に出た千歌と曜。向かう先は「ホシウラシテイ」。これから千歌達には様々な物語が待ち構えているのである！！！！

ー ホシウラシテイ ー

『ホシウラシテイはスクスタ地方で二番目に大きな街です。発電所、商業地、市街地、公
共施設で栄える、スクスタ地方を支えている街とも言えます』

曜 「だって！千歌ちゃん」

千歌 「急に改まって…どうしたの？」

無事にホシウラシテイの港に到着した千歌達は、これからどうするか考えていた。ノープランだと言うから驚きだ：

曜「トレーナーとして初めての街だからね！一応、説明をね？」

千歌「ははは…よく来てるけどね」

千歌達は定期船に乗って、ホシウラシテイにはよく遊びに行っていた。

しかし、逆にホシウラシテイにしか行ったことがない。

要するにホシウラシテイを出ればそこは未開の地。

本やネットでは見たこと聞いたことはあるが、ただただ不安でしかなかった

千歌「どうする？」

チカツチー！

曜「ひとまず、トレーナーの基礎知識を活かして…」

ヨウー！

千歌、曜「…？」

誰かが私達のことを呼んでる?!

遠くからこちらへ近づいてくるのは…見覚えのある顔…

鞠莉「千歌つち〜! 曜〜!」

千歌、曜「鞠莉ちゃん!?!」

鞠莉「二人とも久しぶりね♪」

千歌と曜の知り合いであるこの少女の名は”小原鞠莉”。

小原家のご令嬢であり、スクスタ地方ではかなり有名な少女である

千歌「びつくりしましたよ…まさか、鞠莉ちゃんと会えるなんて…」

曜「お仕事が忙しくてなかなか会えなかったからね」

鞠莉「く♪果南から連絡が入ったのよ!妹達のお世話を頼むって」

千歌「果南ちゃん…」

鞠莉の仕事は後で説明するとして、今、千歌達はとある場所へと移動していた。
ポケモントレーナーには必須のあの施設へ…

鞠莉「着いたわね。千歌たちはあまり利用したことないんじゃない?」

鞠莉「ポケモンセンター」

千歌「はい。来るのはほぼ初めてです」

今までポケモンを持っていなかった千歌にとって、ポケモンセンターは無縁の施設であつた。

しかし、今は違う。

これから何度もお世話になる施設になるであろう

千歌「凄い…たくさんポケモンとトレーナーさんが…!」

中に入ればそこはキラキラとした空間であった。

大きな街だからという事もあるが、トレーナーとポケモンでセンターは賑わっている。

曜と鞠莉の説明を聞いて、千歌はポケモンセンターを後にした

千歌「ここはよく来るよ！」

曜「そうだね！まあ、ミカンとかアイスを買うためだけに利用していたけどね」

千歌「ははは……」

次に訪れたのは我らが庶民の味方、“フレンドリーシヨップ”。

恐らく、ポケモントレーナーで利用したことがない人はいないだろう。

トレーナーでなくても、日常的に誰もが利用するこのお店には、たくさん品物が取り扱われている

鞠莉「千歌つちのために！マリーがトレーナーとしての必須アイテムを教えマース

！」

千歌「よろしくお願いしまーす!」

最初に鞠莉が手に取ったのは、ポケモンに使う薬品だった。傷に吹きかける”傷薬”。

毒や麻痺、火傷などの状態異常の時に使う”なんでもなおし”。

ポケモンの強化に使う”タウリン”など…

鞠莉「誰が名づけたかは知らないけど…名前が凄くなればすぐくなるほど、傷薬は効果が上がるわ」

鞠莉「傷薬、いい傷薬、凄い傷薬…」

千歌「じゃあ、凄い傷薬の上は”最高の傷薬”!!」

曜「まんたんのくすり」だよ。千歌ちゃん」

千歌「あ、あれ…??」

鞠莉「その名の通りだから、すぐに覚えるわよ♪」

次に鞠莉が手にしたのはモンスターボールだった。

モンスターボールにはたくさんの種類がある。

それぞれのボールに特徴があり、その特徴をうまく利用できるかが、トレーナーとしてのテクニクになってくる

鞠莉「ちなみに、昔のモンスターボールは“ボングリ”っていうどんぐりから作られていたのよ♪」

千歌「ど、どんぐり??」

曜「スクスタ地方では見たことがないね」

鞠莉「ジョウト地方の伝統品らしいの。今でも職人が手作業で作っているらしいけど、ここまで流通してくることはほぼ無いわね」

鞠莉はひとつひとつ、丁寧にモンスターボールの特徴を説明していく。

虫タイプや水タイプに有効なボール、暗闇や洞窟で有効なボール、野生のポケモンと出会った瞬間になげるボールなど、千歌には興味深いボールだらけであった

鞠莉「うーん、あなた達にはまだ早いと思うけど、上級者が一番使っているボールは“ハイパーボール”ね」

千歌「うひゃあ…高い…」

性能が上がれば値段も上がる。

当たり前なことなのだが、トレーナーアイテムはどれも値段がおかしい。

ハイパーボールはひとつ1,200円。

千歌の月のお小遣いを一瞬で吹き飛ばすほどの金額であった

曜「まあ、税金が高いから：しょうがないね」

鞠莉「トレーナー税”ね”」

皆さんも考えたことはありませんか？

ポケモンセンターの手持ち回復サービス：

何故、無料で提供できるのか：

理由はそう、ポケモンセンターは公共施設。

トレーナーが必要とする道具には税金がかかる。

その税金でポケモンセンターは成り立っているのである。

トレーナーアイテムの値段が高いのはそのため

千歌「トレーナー同士で助け合う…って考えて頑張ります」

鞠莉「千歌つちいいこと言った！OK♪マリーが、あなた達へ期待を込めて…」

鞠莉「トレーナーアイテムをあなた達に提供しマース！」

千歌、曜「やったああ!!!」

その後、トレーナーアイテムを揃えた千歌と曜は鞠莉に連れられ、とある場所へと来ていた。

ホシウラシテイの電車で揺られ、着いたのは街の西にある広大な“自然公園”であった

― 自然公園 ―

曜「うわ〜広い!!」

千歌「ウチウラ島の森ぐらいすごいね!」

鞠莉「オフコース!小原家が代表として管理している自然公園よ!整備はもちろん、環境保護はバツチリよ♪」

広々とした草原。

森林。

川、池、沼地。

これだけの規模の自然を整備しているなんて…やはり小原家は凄い。
改めてそう感じた千歌達であった

曜「でも、ここで何を…?」

鞠莉「そんなのひとつしかありません!あなた達にはこの自然公園で…」

鞠莉「新たな仲間を手に入れてもらいマース!」

千歌「新たな…」

曜「仲間…!」

千歌達のトレーナーとしての初めてのミッションは――

――”ポケモンゲット”